

栃木県那珂川町新規就農ガイド

農業ではじまる 新たな物語

- 新規就農の支援制度
- 那珂川町の概要
- 農業のはじめ方
- 那珂川町の豊かな資源を活用した特産品開発
- 新規就農ケーススタディ



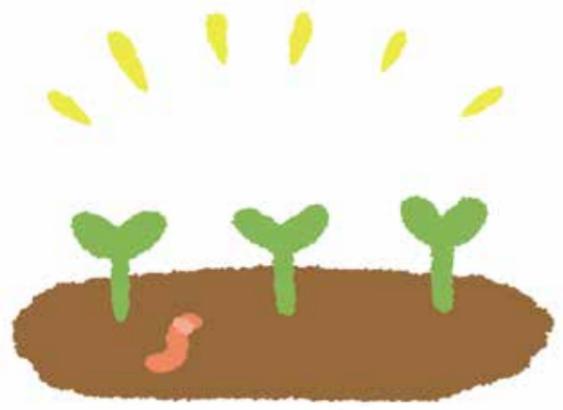
農業という選択

窮屈な生活から
美しい自然の中で
のびのびとできる
農業を選択した人たちの物語。
自然を相手に
忙しいが充実した日々。
そんな生き方、あなたは どう思う？

目次

- 那珂川町での新規就農ケーススタディ
 - 生きる糧となる農と食を担い元氣を応援する 02
 - 有機農業と養鶏による新たな挑戦 04
 - 農業をはじめて出会う新しい自分 06
 - 農業経験ゼロからはじめたネギ栽培 08
- 那珂川町の豊かな資源を活用した特産品開発 10 ※様々な意味で使われるが、ここでは「それすげーな！」の意味
- 農業のはじめ方 12
- 那珂川町の概要 13
- 新規就農の支援制度 14

いやっ、どおーも！



生きる糧となる
農と食を担い
元気を応援する

小鮎拓丸さん
千文さん

10月上旬、秋晴れのすがすがしい陽気の中、小鮎農園を訪ねると拓丸さんが農作業の手を休め、笑顔で迎えてくれた。小鮎農園は山あいの小さな集落にある典型的な中山間地域にある。土地のまとまりが少なく、大型の機械での効率的な農業が難しいため、担い手の高齢化や後継者不足に悩まされている地域だ。

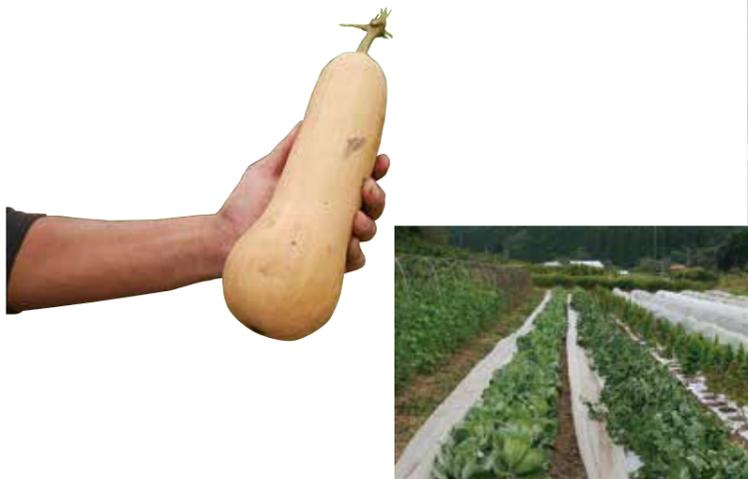
小鮎さん一家がこの地に移住してきたのは5年前の2015年。元々は福島県で農業とは別の仕事をしていたが、千文さんが24歳の時に大病を患い、食や健康について見直す様になった。東洋医学に携わっていた父の影響もあり、自分で能動的に心身の健康を取り戻すような薬膳について勉強を始め、実践する様になった。その頃夫の拓丸さんとの出会い、子供にも恵まれた。そんな中、東日本大震災と福島

第一原子力発電所の事故が起き、子育ての環境が一変。家族会議を開き千葉県の外房で無農薬の農業研修を受けることを決めた。そこでは農業についての知識を得ながら、カフェの運営などに食に関わる活動も始めた。その後、息子の小学校入学のタイミングで独立することを決意し、新たな農業の拠点を求めた。

地元の福島に近い土地で、温泉と綺麗な川と湧き水があるという条件に那珂川町がぴったり当てはまり、移住を検討。千文さんが地域おこし協力隊に採用が決まったこともあり移住を決めた。

最初は家探しと農地を借りられるまで時間がかかるかと覚悟していたが、たまたま空き家が見つかり、大家さんの農地もぜひ使って欲しいとトントン拍子に話が決まった。

千文さんは薬膳の知識を活用した産前産後のケアや毎月の町広報紙での薬膳料理の啓発などの活動を開始。拓丸さんも有機農業で野菜の作付けを開始した。初めての土地なので野菜がきちんと育つか心配したが、元々の土地の地力もあり、自分でも驚



くほど順調に育った。

販路は個人への野菜セットの販売がほとんどで、自分の知り合いから販路を広げ、その人の口コミで少しずつ広がって行った。現在は約50種の野菜を通常で育てており、八丈島オクラやカーボロ・ネロなどの日本や海外の在来種の野菜も栽培する。

千文さんが地域おこし協力隊の3年の任期を終え、本格的に二人三脚での小鮎農園が動き出した。拓丸さんの野菜と千文さんの薬膳がうまく連携し、農園の野菜を使った養生教室や野菜セット十養生通信の販売は好評

だ。

那珂川町に移住して初めて近所の人と組み付き合いが始まった。地域の行事などを共同で行うために必要なものだが、昨年あることがきっかけで、その必要性を痛感したそう。それは拓丸さんが年末の大掃除を行っていた際、誤ってはしごから転落し、背中から落ちてしまった。動けないほどの重症であったため、救急車が駆け付け千文さんも同乗して病院へ。その時、組み内の人たちが食事など子供への面倒を見てくれて本当に助かったそう。

それを期にすっかり組みに馴染むことができたという。普段から気に掛け合う、何かあった時はお互い様。今では組み付き合いは面倒というより、これは必要なものなんだという思いを実感しているそう。「頼ってもいいんだと思える人間関係。人の良さ、温かさ、これが地域で暮らすことの醍醐味なんじゃないかな。」

今後は加工所を作り地域の人と連携してゆず酢の生産量を増やし、漬物か惣菜、ピン詰めなどの製造を検討している。

また、現在の家を食堂などのコミュニティスペースとして活用し、移住の検討の場としてインターネットではできない繋がりをつくる場所として地域に貢献していきたい、と今後の抱負を語ってくれた。



有機農業と 養鶏による 新たな挑戦

リー・パー・クオンさん
片山恵美子さん

恵美子さんは大学院時代にベトナムについて研究しており、その後国際協力活動を行うNGO団体に所属し、ベトナムで活動をはじめた。そこでは、現地の農家の販売支援に従事し、数年間、農産物直売所の新規開設及び運営に携わってきた。クオンさんもNGO団体で知り合った。

ベトナムでは庭先でニワトリを放し飼いで飼うことが当たり前で、おいしい卵と新鮮な野菜を毎日食べていたそうだ。農家の畑に日々足を運び、野菜の生産や家畜の飼育について見聞きする中、資源を有効活用・循環させながら、命の源となる農産物を生産していく農業という職業に魅了され、自分自身でものびのびした環境で卵の生産をしていきたいと考えるようになった。

ベトナムは雨期と乾期のみで、日本のような四季が無い。野菜は気候に合わせて作付けしないといけないため、日本の気候、栃木の気候を理解することが大変だったという。例えば、秋に種をまく日が3・4日遅いと収穫時期が大きく変わる。正しいスケジュールでやっていくのが、最初はとても難しかったそうだ。

1年間農業の研修を受け、その後栃木県市貝町の農地を借り受け、有機農業をはじめた。しかし借地ではやはり自由に農業が出来ない。そこで那珂川町に農地付き空き家が有り、有機農業のグループも有ることから、那珂川町に移住を決めた。

「家と農地を購入し、長期計画を立て自分で実行していくことがすごく楽しい。」とクオンさん。農家出身ではないので、全く新しい仕事になるが、自分たちがどこまでやれるか挑戦しながら進めていくこともすごくおもしろいそうだ。

やすことが難しい。
現在は小松菜、春菊、大根、レタス、ほうれん草、ピーマン、スナップエンドウ、いんげん、じゃがいも、トマト、モロヘイヤ、空心菜などを作付けている。
まずは農業で生計を立て、子供が学校を卒業できることが当面の目標だ。

クオンさんからのメッセージ
ベトナムも農家の高齢化が進んでいるが、日本の農業次世代

人材投資事業のような制度はありません。とてもありがたいと感じています。また、那珂川町の空き家バンクは物件数が多く、いろいろサポートしてくれました。自分の家、畑ができて、そこをどう創り上げていくか考える拠点ができました。それをサポートしてくれた那珂川町に感謝しています。

仕事や生活環境で大きなプレッシャーを感じていたり、行き詰まっていたり、そんな人はぜひ新しい選択肢に農業を入れて欲しいと思います。体力的には大変だが、心にストレスはかからなく、農業の方が歳をとっても続けられると感じています。



で、まとまった時間が取りづらく、レジャー施設に簡単には連れて行けないという悩みもあるそうだ。

現在就農して3年目。技術面では有機農業のグループ出荷をしている経験豊富なメンバーからサポートを受けられるので心強い。順調にいつているが、新たな販路の確保が課題だ。生産量を増やしたいと思っても、売り先を確保しなければならぬ。





農業をはじめて 出会う 新しい自分

小林千歩さん

千歩さんが嫁いだ小林家は米を中心とした大規模農家だ。隣の農家から農地を借り受け、米やソバを作付けしている。結婚してすぐ子供が生まれたこともあり、農業をはじめめる前は主婦だったという千歩さん。

3人目の子供が認定こども園に入園することになり、何かはじめようと思ったことがきっかけで、時間的に融通が利き子供を優先できる農業をやろうと決意した。

作目にこだわりは無く、野菜を中心に広く検討していたが、タイミング良く近くのいちごのハウスで借り手を探していたためいちごを栽培することになった。

最初は作り方が分からない、失敗できないなど、不安でしか無かったという。それでも近所のいちご農家の人や県農業振興事務所、JAなどたくさんの人

農業を目指す。米も手伝いたい、地元の高校生とも一緒に何か取り組みたい。まだまだやりたいことがたくさんある。

千歩さんからのメッセージ

農地を持っていないくても、経験が無くても、いろいろな人が助けてくれるので、農業に興味がある人はぜひチャレンジして下さい！



が作り方を教えてくれて、何とか収穫することができた。

現在は8aのハウスで約5、500本の苗を育てている。販売先は道の駅が中心で、その他JAなどへ出荷している。

「農業をはじめめる前の自分とんなだっけ。」以前の自分が思い出せない程、大きく変わったと笑顔で話す千歩さん。朝は早く、春は日の出と共に4時に起きるようになった。

農業関係の友達も増えたという。農業女子プロジェクトに参加し、同じ様に農家に嫁いで農業をはじめた人達と繋がりができ、同じ様な悩みを抱えている仲間に出会えた。様々な情報を共有しながら、お互いに支え合っている。

農業は農作業だけではない。土いじり、農作業、選別、内職、販売、営業、その他にもマーケティングや経営、簿記やパソコン事務などオールマイティな自分がいて、忙しい中にも楽しさを感じられる。

また、2年前からレモンとパッションフルーツの栽培にも挑戦している。今後栽培技術を身につけながら、那須のホテルや洋





農業経験ゼロから はじめた ネギ栽培

磯野淳子さん

那珂川町出身の淳子さん。小・中・高と地元の学校を卒業して一度地元を離れ、結婚を機に戻ってきた。建築関係の仕事をしている夫と、大学生1人、高校生2人の5人家族。

「今年は長雨の影響で大変でした。」と話す淳子さん。葉をかけたも雨で流されてしまったため、ネギに病気が発生してしまった。また、土寄せができずネギの白い部分が少なくなってしまう。規格に合わないものが多かった。ただ、野菜の値段が上がっており、トータルの売り上げは変わらない見込みだ。

農業をはじめたきっかけは、知人から「野菜を作ってみないか？」と声をかけられたこと。夫の実家が農業をしていることもあり、興味もあったので思いきって就農した。家事や子供たちの都合の合間を見ながら作業ができるということも理由の一

つだという。

畑を探すのに苦労は無かったという淳子さん。農業をはじめたことを聞きつけた地主さんが、ぜひ使って欲しいと複数の畑を紹介してくれたそうだ。

作目は1年間収穫ができるネギを選んだ。年に4〜5回、6〜10種類程の品種の種をまいている。どの品種が良いか、お客様の味の評判や栽培のしやすさなどを研究中だ。

栽培の仕方はネギ専業農家や近所の農家、インターネットで調べ、手探りの状態ではじまった。当初はネギ用の設備が無く、すべて手作業で行ったため、長さがバラバラで規格外のものも多く、処分するものの方が多かった。それでも、今では少しずつ農機具もそろえ、出荷作業など家族のサポートの他、パートさんも雇用し、スーパーやJAなどに安定して出荷できるようになってきた。

慣れない農作業は体力的に大変で真夏や真冬の作業、強風の中での作業、自然災害の対策など毎日休みなくネギの面倒をみなくてはならない。でも、体を動かすことは嫌いではないので、

セント良いものが収穫できることはないので、日々研究し、良いものの割合をいかに増やすかが最大の課題だ。これからもちくさんの人のアドバイスをもらいながら、野菜の魅力を追求していきたいと力強く語ってくれた。

出荷先はJA系統出荷の他、地元スーパーや道の駅など。ネギは連作ができないので裏作としてレタスやカリフラワー、トウモロコシ、大根、にんじんなどの栽培もはじめた。100パー





那珂川町里山ほんもろこ

那珂川町にある馬頭高校水産科では、「町内の休耕田をホンモロコの養殖池に」という生徒のアイデアがきっかけで、平成22年にホンモロコのふ化に成功した。それを受け、高級魚ホンモロコの養殖に取り組む那珂川町ホンモロコ研究会が発足し、休耕田を活用したホンモロコの養殖がスタートした。

令和2年現在、町内で養殖する組合は6組合に増え、ホンモロコを使ったレシピ開発も行っている。

美しい里山のきれいな水で育ったホンモロコ、一度食べたらやみつきになるおいしさだ。



いやっ!
Yeah!

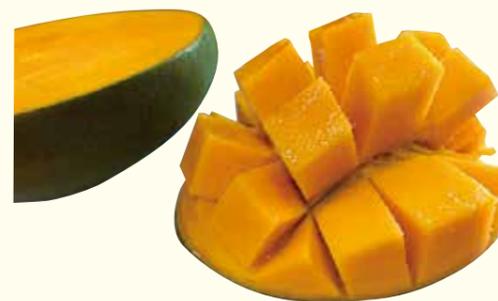
なかよしマンゴー

那珂川町では建築用材として八溝杉が生産されてきたが、近年では木質バイオマス発電所での間伐材の利用や、間伐材を地域通貨券に変えて地元商店街で活用する木の駅プロジェクトなど、未利用資源の活用が進んでいる。

木質バイオマスボイラーの余剰熱を利用したフルーツの栽培も行われ、マンゴーの栽培はそのような取り組みの代表例だ。

贈答用のアップルマンゴーの他、幻のグリーンマンゴーやキンミツなど、珍しい品種も栽培され、町の新たな特産品として注目されている。

濃厚な甘さと、とろける美味しさをぜひ味わって欲しい。



温泉とらふぐ

那珂川町には馬頭温泉郷など大小の温泉宿があり、美しい夕焼けが楽しめる夕焼け温泉郷や、美人の湯として知られているが、馬頭温泉郷とは別の源泉に塩分を含むナトリウム塩化物泉がある。その源泉は塩分濃度が1.2%と生理食塩(0.9%)に近いことから海産の魚も養殖できるのでは?という発想から、高級魚であるトラフグの養殖事業が実施されるようになった。

温泉トラフグの特徴は、塩分濃度の低い水質で育てられており体液の塩分調整が必要無いため、カロリー消費が無く海水産のトラフグよりも出荷できる大きさに成長するまでの期間が短くて済む、無毒の餌と無毒の温泉水で養殖するので「フグ毒」テトロドトキシンが無いなどの特徴がある。また、出荷する直前に行う味上げ技術により、うまみ成分が増しておいしいトラフグになる。



どおーも!
Do More!

八溝ししまろ

栃木県と茨城県、福島県に跨がる八溝山地では、毎年イノシシによる農産物の被害に悩まされている。町では平成21年に獣害対策としてイノシシ肉加工施設を設置し、「八溝ししまろ」としてイノシシ肉をブランド化する取り組みを始めた。

イノシシ肉は鮮やかな牡丹色で味わい深い旨味がある。八溝ししまろは「くくりワナ」で捕獲し、止め刺し後にしっかりと血抜き作業を行い、衛生管理の行き届いた加工施設で処理している。そのため獣臭さは全く感じられないおいしい肉として評判だ。

町内の温泉旅館や飲食店で鍋やそばなど趣向を凝らした料理が楽しめる。



町内の温泉水や休耕田、間伐材やイノシシなどの地域資源を活用した取り組みが、小さな町で次々生まれている。

那珂川町の豊かな資源を
活用した特産品開発

那珂川町の気候

気温の較差が大きく、春や秋は那珂川などの河川の周辺では霧が発生することが多く、夏は内陸特有の昇温により激しい雷に伴って局地的な降雹がみられます。冬は朝の冷え込みが厳しく、氷点下の日もありますが、晴天の日が多いのも特徴です。12月～2月は、日中昼間の時間が夏よりも4時間も短いのに、日照時間は夏よりも多く、1月の那須烏山観測所の日照時間は、平均して6・7時間前後です。このことは、とちぎの「日本一のいちご生産」を冬の天気が後押ししているといえます。

年間降水量は約1500mm、積雪は年間5日前後で、冬は「日光おろし、那須おろし」と呼ばれる強い風が吹くことが多いです。

農業用ハウスなどを活用すれば通年で野菜の作付けができる環境であり、様々な作目が作られていることが特徴です。



位置と特徴

那珂川町は、栃木県の北東部に位置し、町の約6割を山林が占め、中央部には、関東有数の清流・那珂川が流れます。那珂川は天然鮎の遡上が多い川として有名です。温泉施設やキャンプ場、ゴルフ場などのレジャー施設にも恵まれています。

那珂川町から宇都宮市まで約45kmで、車で約90分、JR氏家駅まで車で約40分のアクセスです。

歴史文化

栃木県北東部を南流するこの那珂川流域には、河川に沿って数多くの文化遺産が残されています。東北地方や北陸地方、南関東地方の文化の接点として各地域の影響を受けた独特の文化が縄文時代から連続と続きます。特に那珂川と常川が合流する地域には、古墳時代には栃木県で最も古い時期に築造された駒形大塚古墳をはじめとして、前方後方墳が狭い範囲に次々と築造され、奈良時代には那須郡の役所である那須官衙遺跡が置かれるなど、この地域が古代那須国の中心地とみることができます。



「日本で最も美しい村」連合に小砂地区が加盟

那珂川町の小砂地区は平成25(2013)年10月4日、「日本で最も美しい村」連合へ加盟しました。これは、日本の農山漁村の景観・文化などを守る活動をしているNPO法人「日本で最も美しい村」連合により、小砂地区の「里山に伝わる伝統の技 小砂焼と菊炭」と「小砂里山の芸術の森」の2つの地域資源などが評価されたものです。

小砂地区では、これを機に小砂の里山ならではの美しさに磨きをかけ、伝統とアートを切り口とした景観形成を進め、さらに誇れる地域づくりに努めています。



那珂川町が県内第1号の指定棚田地域に

令和2(2020)年7月10日に那珂川町の3地域(旧大山田村、旧大内村、旧馬頭町)が指定棚田地域に指定されました。指定棚田地域とは、昭和25(1950)年2月1日時点の市町村の区域で、勾配が20分の1以上の棚田が1ha以上ある地域の中から、都道府県の申請に基づき、国が指定するものです。

今後は、令和2(2020)年6月1日に設立された「那珂川町中山間地域活性化協議会」を中心に、中山間地の豊かな自然や棚田等の維持及び、それらの資源を活かした交流人口の増大や移住の促進に努め、豊かな農村文化を継承できる取組を実施していく予定です。



農業のはじめ方

めざす農業経営像を描く

- 1 まずは農業について情報収集することが必要だ。土を耕して作物を育てる耕種農業と、家畜を育てる畜産の大きく2つに分けられる。どの作目を選ぶかによって農業経営のやり方や仕事の内容が変わってくる。
- 2 作目は単一の専作経営か、複数以上の複合経営か、経営のタイプを決める。
- 3 露地栽培か施設栽培か、通常栽培か有機栽培か、栽培方法を定める。
- 4 農作業に従事できる労働力と作目・経営タイプ・栽培方法の選択、経営規模などがマッチしているか、考える。
- 5 選択作目や生活条件、都道府県、市町村の支援措置などから就農候補地を検討する。
- 6 地域で生きていくためには人間関係が大切なので、できるだけ現地を訪ね、自分の脚で農地・住宅・研修先・生活・農業経営環境などの関連情報を収集する。



5つの生産資源を取得する

技術やノウハウの取得・資金の確保・農地の確保・機械や施設の確保・住宅の確保

営農計画の作成

生産計画、販売計画、資金計画を明確にする。

就農

農業経営のスタート



令和2年度新規就農支援制度

国の制度

農業次世代人材投資資金（準備型）

栃木県が認める研修機関（県農業大学校等）で研修を行う就農希望者で、一定の要件を満たす方に、最長2年間、原則、最大150万円/年を交付します。

農業次世代人材投資資金（経営開始型）

一定の要件を満たす新規就農者に、農業経営を開始してから経営が安定するまでの最長5年間、最大150万円を交付します。

町の制度

農業後継者育成支援事業

親元就農者、農業の研修を受ける者（研修者）、研修を受け入れる農業者（受け入れ農家等）を支援します。

対象者 ①親元就農者 【主な要件】 認定農業者の農業経営を継承する就農日における年齢が50歳以下の者
②研修者 【主な要件】 町内外の認定農業者等で農業研修を受ける50歳以下の者で、月120時間以上の研修を6か月以上受け、研修後1年以内に町内で独立・自営就農を開始する者。

③受け入れ農家等 【主な要件】 町内で農業研修者を受け入れる認定農業者等

補助金額 ①の対象者 農業後継者支援交付金 50万円
農業後継者（土地利用型）機械整備支援事業費補助金
機械の取得経費の1/2以内、限度額150万円

②・③の対象者 研修期間の内、6か月以上12か月分まで、月額2万円

園芸作物振興対策事業

園芸作物の栽培を希望する新規就農者の就農及び新品目の栽培、規模拡大を目指す農業者が必要とする施設、栽培管理用機械、資材等の導入を支援します。

対象経費 ①パイプハウス等導入に要する施設資材購入費
②栽培管理用機械及び出荷調整用器具購入に要する経費
③栽培管理資材、種子等購入に要する経費

補助金額 ①の経費の1/2以内、限度額150万円
②の経費の1/2以内、限度額30万円
③の経費の1/2以内、限度額20万円

農産物加工推進事業

農産物の加工販売推進に向けて、必要な技術の習得、調査研究、加工機械器具等の整備を支援します。

対象経費 ①加工や販売など6次産業化の実践に向けて必要な技術習得、調査研究に要する経費
②試作加工に必要な調査、加工委託経費
③加工機械器具等の整備に必要な経費

補助金額 経費の1/2以内、限度額50万円 ①は上限20万円、②は上限20万円、③は上限50万円

農作物鳥獣被害防止対策事業

農作物等を鳥獣から保護する防除用器具の設置等を支援します。

対象経費 鳥獣被害防止柵設置のために必要な経費
（機械器具購入費、委託料等）

補助金額 対象経費の1/2以内、限度額5万円

耕作放棄地再生利用緊急対策事業

里山環境を維持するため、耕作放棄地の再生を推進し、農地の維持、農業生産力の向上を支援します。

主な要件 事業面積10a以上

対象経費 耕作放棄地解消に要する経費（農地整地費等）

補助金額 対象経費の1/2以内、限度額30万円

那珂川町スマート農業推進事業

省力化や生産性の向上、高品質な農産物生産に必要なスマート農業技術を活用した農業用機械等の導入に要する経費の一部を補助します。

主な要件 認定農業者、認定新規就農者、人・農地プランに中心となる経営体として位置づけられている者、農事組合法人、農地所有適格法人等

対象経費 農業用ドローン、トラクター等の自動操舵補助システム等、IoTの通信技術を活用した水田の水管理を目的とした機械等
補助金額 対象経費の1/2以内、限度額300万円。ただし、1申請者につき令和2年度から令和6年度までの合計額は300万円を限度とする。





